[illegible]

F
キ−15

490.9
Ki-3

No. 5060

慶應義塾大学医学情報センター
昭和47年7月4日

富士川文庫

1580

瘧病（キヤクヒヤウ）奇藥法

一 菖蒲の根石菖の根蓮の根右を煎じ用ゆれば
いかなるおこりも落るよし

一 河豚（かぐ）にあたりたる時青黛の粉を水にかきたて
呑させば忽ち毒を解して別条なしとぞ

一 衣類に漆の付たるには姫のりをとりて付て
静に洗へば年歴（へ）たる漆にても落る事妙也

一 同漆の付たるには漆掻洗粉と粉の儘に
衣類へ振かけ紙を当て押置候へば一夜の内に
漆掻るや繋綿入にて洗右のごとく洗ひ候ても
漆は有まじや毛度洗ひし如し右業として見し
右のとふし洗ふべし

一 目血の付たるには水を口へ含み吹りこむ也
落る也衣服はよく口に含みしたゝりは二

一 大鼠に喰れたるものハ千振を砕きて能ねり其時毒ハ残りて年々発るもの也（能[illegible]出る[illegible]）

一 乳の出る薬法 米を夕水に漬置能摺細にし能く煎じ産婦に一盃呑せ又暫して二三盃呑せよし 乳の出る事妙也

一 円鶏卵を味噌汁にて煮て食すれハ乳の少き婦人も能く出るなり 鯉の濃汁も同様なり

一 麺(メン)類にあたりしときハ早く瓜(ツメ)を喰へ

一 [illegible]しにあたるに甚よし

一 かにのりよくにあたりしときハまくわうりの皮と黒豆を呑せてよし

一 豆腐にあたりしときハ大根のおろし汁がよし

一 木の子にあたりしときハあんずの葉をせんじてよし

一 そばにあたりしときハ味噌汁呑せてよし

一 老若人同ハかげん食するものや都七分にて酒ハ半酔ほどに止バ無病長寿うたがひなし 淡きものの多数ホを慎りて日ニハ少宜 薬ハ以つわ解とせぬようにしてくとかや

鶴と料理まゐりのくしでめでたし

但し聖人の語なり

花ハ半開と見酒ハ半酔すべしとぞ

髪の毛落さとるを残すなハ桐の木の枝と

せんじ洗ふべし髪を美くし艶と

ありくの奇妙也

丑の年の六月去年の丑の日小柚の実と

夜丑の刻ゝ糸と毎を新千やして仕舞也

強き風ハだんがうき風秘かてもな

石の柚の皮を急きせんじ用ゆれバ熱気去

強き痛乃病らるゝにあり

閑窓瑣談養生之部

枸杞ハ養生の仙薬なり老子曰人生れて百歳を

以て限りとして節護者ハ千歳に至るべし人皆と

もつて意を累さず澹然として無為なれハ神気

自ら満ゝ不死の薬とする彭祖が曰人身

虚無なれバ衰と思ひて食と思ひてもひもなれハ

心労せん神極らずして千歳を得へきなりと

斯（カク）ハ有どもあらくハ仙を学（マナブ）の人ならバ

いかで思慮（シリヨ）なく活業（ヨワタラ）せんや亦神氣を養べし

とりも生得虚弱（キヨジヤク）なる者ハ病の為に神心勞して

天壽を保（タモツ）の術なくして既（スデニ）初老多病にして

中年より衰へかりし春花秋月にも引籠（コモリ）居て

見もせねふりのみ多かりして愁眉（シウビ）を開く由なく

一向（ヒタスラ）針灸（シンキウ）薬餌（ヤクジ）を求め病苦を忘（ワスレン）とするのミ

ありしに或人一方の良薬を教（ヲシヘ）られしより

今ハ二十余年来病を忘て平安せり

抑（ソモ〳〵）其の薬といふハ最（イト）安き一品にて製するなれバ

かくいへバ世の人一統に之を知る枸杞（クコ）を煎（セン）じて

茶に服せバかならず延壽の妙剤（メウザイ）なりといふに

服して腹（ハラ）を和らげ精を益させよ神乃ごとし

されバ拙子ハ枸杞の枝葉を一連に刻（キザ）ミ蔭干に

して貯（タクワ）へ又焙爐（ホイロ）に乾（カワカ）し日毎に是を茶の代りと

なせしより三四年にして持病を忘る五六年に

して壮健なりしと正に還童の氣力にて若く

枸杞なく齢（ヨワイ）を延せらるゝに今六十余歳を保なり

生を貪(ムサボ)る所為(ワザ)ハあらねど病を除(ノガ)れ嬉(ウレ)しさに
世に在人の親疎(シンソ)を論せず此の枸杞を悦して
補元精盛の功を賞せし則ち萬病の愁ひを
除て天壽を保ちたまふしと預子柳子が
丹誠(タンセイ)の老婆心を著(アラワ)く十方に告そするのみ
○本草綱目ニ曰
枸杞の一名を仙人杖また西王母杖ともいふ補腎(ヨキナウジンヲ)
爲(ス)滋(シ)補(ボノ)薬(クスリト)堅(カタクシ)筋骨(キンコツヲ)不老(フラウ)易(ヤスシ)顏色(ガンショクヲ)明目(ス)
令人長壽あらしむ壯心氣去皮膚骨節
間風用枸杞煎湯洗澡令人光澤
是本草に載(ノセ)たる數百の功能より出づる
一二を略してあらんハ
圓機(ヱンキ)活法(カツホウ)　是ハ神仙を学ぶの古事なり
枸杞を烹(ニ)而(テ)食(クラフ)之忽(タチマチ)覺(ニ)身輕(ニ)飛(ニ)峯上(ニ)
康熙(カウキ)字典(ジテン)　枸杞の篇(ヘン)
枸杞地骨服之輕身益氣
兩大師傳記
枸杞ハ心氣を壯にして五労七傷を補の傳を記せり

右に記せしところハ只枸杞の能ありて昔より
奇薬と尊ミし證古ハ諸書に略しぬ
引たるのミ委しくハ本書を讀べし
合瓢（あをやひさご）の挽しもあらざる時ハ紙糊ふしても用ゆべし
股ハ菝葜とかへてよく練りて付る時ハ毒をとるし
蘇澤の葉を粘るまで黒焼にして胡麻（ごま）の油に
和しよく付べし金瘡（きんさう）切り疵（きず）火いりおどめ
ことに其后用ふるに洗ひてよく念るると妙なり
楠正成が家の法なりとも云大松屋のおし

予ハ幼くより予が友中根錦部といふ者の
手ハ腰ふよりて切られし時三寸ばかりの
疵口此薬をつけしに忽に全快せり
予がきゝおよべるまゝ其の験を書記す其外ハ余多ありとぞ

○春の日の長きに草もかりそそんとくかりはくせ庭の麦草
正月七日七種ハ稲（いね）麦（むぎ）豆（まめ）粟（あは）黍（きび）小麦（こむぎ）豇此七種を以奉るとし
又あるハ七種と書くあをきと訓せらるゝ宇多天皇の御時
改らし芹（せり）薺（なづな）御形（ごぎやう）（一名母子草）繁縷（はこべら）佛の座（ほとけのざ）（一名田平子）菘（すゞな）
菁（すゞな）蘿蔔（すゞしろ）（大根なり）右七草を用ひらるとあり

一 古（いにしへ）ハ上の子（ね）の日を定まりし事七ツの字（じ）に縁（よ）りて
七日を用ゆる事となりしとぞ

一 破傷風（はしやうふう）ハ第一蝸牛（かたつむり）を用ゆべし勝れたる事ハ
速に治す若あれバ薬もなき酒有とも老かし
早ぬ之バ之を振りしみ四ツ分とし
米のより遣バ重ぞ

蕎麦を解き奇法の事

一 或人あしき湯でゝ濁を一遍洗ひそばとゆで
たるに乳角なれバ用ゐざりしといへる
日席に於る老人ありてあしき兎ハ如る蕎麦を解を
此業のより在りしに是ひ余りぬといへり

一 楓木にて生ずる茸毒茸にてあやまちて
是を喰へバ笑ひ止ず終にハ死するなりと云
毒経を汲し如て早々下の溜の側の土黒くぬと
煎て湯にて用ゆる呑せよすよ吐却しく
毒気を解し速に快活せしとなり

一七月聖霊棚へ敷く真菰ト海老垣の杉の葉を手
一束小切まへ南天の葉を添へ囲ひ置き毎年
六月の祓をいたし毎しくやし出沁ひて
年しよ祓包るゝ事なし

一五月五日巳ノ時刻ニ棗（ナツメ）と榧（カヤ）の實（ミ）と茸（タケ）ハ
数の出る事なし

一日毎月又ハ朝巳ノ時刻ニ［儀方］此文字を書て
同じく張置ハ疱の出る事なし

一節分の日豆まきぬる前の豆を其家の主
已（レ）の歳の數程いたゞき豆を井戸に入置ハ家内眼病無し

一蛸（タコ）を喰ふ時よ喰まよハ蛸を焼きて絶えぬのあつまま
こぶと云り右のあつまく酒一盃水一盃

一盃の消えて四ゝせばよ喰てよ喰へやまぬ事なしや

一 鮒(フナ)の昆布(コンフ)巻と云ハ銀杏(ぎんなん)を入て能煮へてバ
和らかになり妙也

一 澤庵漬の大根砕く右漬ハ昆布ニ而巻と
巻て右の漬樽の中へ入置バ珍味出る也

一 甘酒一時作り法 是ハ糯を能しめし蒸て
糯米壱升あらバ麹壱升を出しさくら飯を焚
飯溜之桶ニ能洗ひ水手を能く拭ひ置
是へ一番ニ糀を並べ其上へ飯をあつく多く
右のごとくして 一夜上へ出ても とかす

よくくしかして揉針切大いと并て温氣生姜を
壱枚上へ敷まハ蓋と致しあたゝかへ火を置
前くらの上へ右の桶を右も置と是をり
夜かくと咲かせて能く揉針え右のごとく
致し一夜六分右のごとくなるとひとしかるべし
甘するとゆるるとも春也也
（但し此日方遠火ニ而能火乾す）

一 小児百日咳よかんてきけるのやこと出ハ能て
荒神の絵馬を取て 右の絵馬の鶏(かしとり)

胞（ホウ）の内へ帰の字を三つと書て絵馬のにかわ乃
ちとえもりし寝（いぬ）る時とんの下へしきて
絵馬ハ小児のあとさきの為なるべし其
其歌をいれのとし
　夜とさいしてるまのそら絹ハもかうこえ
　世りし逢坂の関ハ雪もし
右の歌三首書て墨をぬくも其墨ゟ
ぬりあくしゟ咲出ゆる彩しき絵馬
そのかめし

一　井戸の水にごりしときハ此の歌を書て
井戸へ入るべし
　あさやさのわれ一つ見る月もさて八
　志らぬまの知らずかよふ坂のせせき
一　洗ものゝあかと洗てもおちさるあかを落すにハ
左のうたを唱ふべし
　まかなくに何を種とて浮草の
　波のうね〳〵おひ志げるらん
右ハ小野小町双紙洗ひ歌とかや

一朱肉(シユニク)を製(セイ)する法艾(モグサ)に朱を交へ白しぼりの油を唐蝋のよろしきを練(子リ)合て朱肉とし用ゆる也蓋よろしからん朱肉ハ松脂(ヤニ)を湯にて煎(セン)じ灰水(アク)とぬめひて干かまうし唐胡麻(トウゴ)の油を交て赤らかなる最上(サイジヤウ)の製にて朱の色もうるはしくなるなり但唐胡麻の油ハ薬店にてひさぐ

四神相応の地は経に四神相応の家に居れは災(わざはひ)を転じて福とまねく加茂の保憲のいふ此平安城ハ桓武天皇の開闢ましましける都にして東に加茂河の流あれハ青龍に配し南ハ巨椋(おぐら)江ありて朱雀に比し西に大道ひらけ北に高山聳(そびく)えたるハもとより白虎玄武の象(かたち)なしひやさとハ秘經圖ハ四神相応の地也但家に四神あると

いまし聞及給ふ大聖文殊菩薩の宣ふとあり
青龍ハ鱗魚中の上首として常に水底にあるといへ
東に河の流あるをもてもち擬によし若流なき時ハ
柳樹九株を植て水に代べし　柳ハ水辺の樹
なればなり鳳凰ハ禽鳥の上首なり常に田の辺に
居れば南に澤畔あるをよしとし若なき時ハ
桐の木七株を植て是に換べし　鳳凰の
栖巣なれハなり　白虎ハ走獣の上首たる故に
均なる途を走る故に大道を西にあらしむ若道
なき時ハ梅樹八根を植べし是白虎の梅樹に
棲が故になればなり　玄亀ハ甲虫の上首なり常に
山乃谿にすめるに依て北に山を崇む山なき時ハ
槐樹六本を植べし槐ハ山の峯に生る樹なり
故に是を高山に代べし抑四面に計四種を

若し中に[illegible]と居らバ富貴自在ニ子孫
繁昌すべし[illegible]と逆と閑（かく）時ハ災禍（さいくわ）其方より
至るとハ宣ひしもまり保寒の住居するに
北に二葉の山聳（そび）へ河の流れハ東に遶（やく）り西ハ衢（ちまた）ありて
人の往来（ゆきき）志げし[illegible]閑（かく）不ハ南の方（かた）に沢畔なし
文殊の聖語何ぞ偽ならん[illegible]よく桐樹七株と
植て四ツの神と全くまへしと云て彼[illegible]

一 吐（とげ）ぬきに希なるき薬あり是ハあらせん花と云ふ草にあり花実根ともに黒焼にして青松葉右同じくにして二味共細末にして用之と知る人の傳し

一 驚風（きやうふう）の薬 浮石（うせき）を粉と削（けづ）り茶碗（ちやわん）に水一盃半入て一盃に煎（ちん）じ用る妙なりと鵜殿（うどの）氏の語なり

一 瘰瘡（りよそう）ある人足[illegible]ざる薬○石灰（いしばい）○半夏（ちんげ）等分 木香（もくがん）丸（まる）細末にして右の薬酒にて足の膝頭（ひざがしら）より爪先（つまさき）迄ぬり[illegible]あたゝかなる湯にてあらふべしと見[illegible]

るあり足かろく歩す神妙あり
又草鞋（わらじ）喰（くい）踏出（かこ）し足拵（あど）ハ鞍（のり）によわしますせ膏薬（かうやく）の
おとく押よの人ふまるとしよく治（ぢ）す是と浪脚散（ろうきやくさん）と云

一人の性によりて馬の毛性あるへし
一条禅閤（ぜんかう）の四形天象（せきそ）往来（こうらい）に曰
葦（あし）毛 青 雲雀（ひばり）毛ハ木性の馬 鹿毛 栗毛 月毛
火性の馬 霞（かすこ）毛 鑑（すり）ハ土性の馬 佐目（さめ）鴾色（ときいろ）毛
金性の馬 黒ハ水性の馬と云々 謹文正聖
四へて用ゆる云一如ひまて宜其之せへし

喫茶養生記

鎌倉将軍實朝公病あり榮西禅師を徴て加持
せしむ禅師君の容躰を視て加持の暇ニ茶を献る
唯一服ニして平快あり大ニ奇異なる事ニ思召
その時禅師一巻の書を捧ぐと東鑑ニ載たるハ
此養生記や是より後君も臣も茶ニ能あるをよく
知りてあまねく用る事となりたりかの書乃
序ニ建保二年甲戌正月日謹で叙をとりて

其書第一ニ五臓を和合し鬼魅を除き遣ることを
以て始まり五臓和合といふハその好所ニ随がふなり
○肝の臓ハ酸を好○肺の臓ハ辛きを好○心の臓ハ
苦を好○脾の臓ハ甘きを好○腎の臓ハ鹹きを好
かく味ひを好む事各同じからざるニ因てその好味多く
過る則ハその臓のミ強くして他の臓を剋し自然
病を生ずるニ至る志かるニ辛酸甘鹹の四味ハ人恒ニ
喰ふ所苦味ハ常ニこれを食せざれバされバ四臓ハ

常に強く心の臓のみ弱（よわ）くして病を生ずるに至るや但し心ハ五臓の君なれバ其臓病（やむ）ときハ一切の味ひを違（たが）ひ食する則ハ吐き（え）錢（や）もすれハ食尽人の皮肉の色悪く運命これに因て減ずとぞまくに能て茶を喫（きつ）すれバ苦味をもつてこれを強き故に病平伏する事あり其人心神快りくさすれバ爾時（そのとき）茶を喫して心の臓を潤へ万病を除（のぞ）金すべし心の臓快りすれバ諸臓に病ありといふとも強く痛（いた）まざるといへり又曰心の臓ハ五臓の君子や茶ハ五臓苦味の上首也苦味ハ五臓諸味の上味也是に因て心の臓ハ其の味ひを先心の臓與（あた）る所ハ諸臓をあんずる事あり其身弱（ちやう）く衰（せう）消ずる者ます心の臓の損（そん）ずる事あり頻（しき）りに茶を喫して氣力強盛（がうせい）事ありとあり

塗物覚

一 極堅地ニ仕立候ニハせしめうるしと訶ニてこく
薬研ニ而地の粉と炭粉をまぜ申し錆かひニる
能かひ候こなとかひニるかひかひあゝし能ゝ付
三へんと捕ひ風呂ニかけ申しかわき申しくて
砥石ニて磨き其の上ニ如く磨し塗七八へんニて
中塗仕上ケ申候

但 ませみ彩ニて中ハうるしやニて黄粉のハ不宜く
白本ハ生せしめうるし薄く塗可申

角を延して十六盤の桁などに引かけ角を捻てそろ〳〵と
ゆるかなる火にて煑ればとろ〳〵に成るとぞ但し角の形は
始めのまゝにてどろ〳〵に蕩けると云
硝子を切には火打石の角にて擦切るなり
又硝子に水泡を入其硝子の上に生の棗の汁を付ると
其上よりも泡を入事は自然に付ものなり
作りに赤くゆかりを付る法竹の上に文字を書とも絵を書とも
書き其上に糊をしてまた其上に糠を付させて
日に干し二度めのころ干しの根をひしと巻つけて
かわけばすこし其上を竹の皮にてはぎすてに
置てむきて見れば赤くなる事妙なり

産人てする事の事

○一早く[illegible]往歩を[illegible]宮[illegible]ひと[illegible]

産の[illegible]ハ[illegible]産人へ食事すへしと云ふ[illegible]

[illegible]有り[illegible]門[illegible]の[illegible]婦人

つかんとするよ

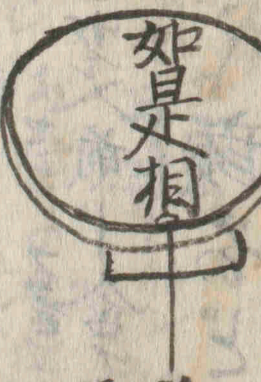
右此の[illegible]を[illegible]仲[illegible]目の[illegible]

一　盗人入さる哥の事

何田舎なる住居せる福家富貴へいと目出度家ありけれは家に盗人入事有りといふ家に傳へる哥あり寫し門戸に張置ぬ盗人つゐにとらす

白波の寄て添ふや塩るらん津軽ある目の
詞まし寄る是也

○玉誉（ギヨクヨ）上人琢淳（タクジユン）和尚の傳に云咽喉（ノンド）に魚鳥の骨の立たる時ハ盃に如是（ニヨゼ）桐（サウ）と墨にて書る文字の倒（サカサマニ）に図の如に示シを付其盃に水を入文字の筋より呑ますべし忽（タチマチ）ちに抜（ヌケ）る事妙なり



此所ゟ呑べし

○小児の胎毒（タイドク）頭瘡にハ桐の葉を煎じ銅盥（カナダライ）にいれまし火鉢にかけ是余程につくして瘡を洗ふべし七日にして（毒く）吸出し蓋（フタ）成るあり二三遍と度く洗ふべし濃汁（ウミシル）出て流るゝあり左押葉にハあらじ疑（ウタガフ）事なかれ

○血止の方（并金瘡に用ゆ）反鼻（ハンヒ）キリンケツ（右）二味を青木のけにて解（トキ）奉書の紙に刷毛（ハケ）にて引なり 疵（キヅ）の大小によりて切裂（キリサキ）て附べし 奉書の紙を蒸籠（セイロウ）にて能（ヨク）むして薬を引置し 左（サ）なき時ハ紙堅成（カミカタクナリ）て用ひ（ヒ）がたし 蒸（ムシ）て乾枯（カワカシモム）時ハ綿のごとく和（ヤワラカ）になるなり

○口中くだけたる時ハ松葉（マツバ）（三千本）山椒（サンシヤウ）（十粒）塩（シホ）少シ入煎（セン）じ含（フクミ）てよし

○湯火傷（ヤケド）ハ薬さまざま有るなれども別（ワケ）て顔（カホ）などを焼所（ヤケド）ありてハ生涯（セウガイ）の心痛（シンツウ）なり 此方ハ疵（キヅ）不付して痛を止め皮肉（カワニク）元の如し ○唐黒砂糖（トウクロサトウ）少シ雞卵（タマゴ）の白實（シロミ）の汁斗りを右砂糖と能（ヨク）交合て鳥の羽根にて幾度（イクタビ）となく附べし 但し雞卵の汁をねばねばりてつよくこき時ハ水を交（マゼ）和（ヤワラカ）にしてはきを置べし

○小便閉（セウベントジ）て通じ難（カタキ）にハ枇杷（ビワ）の葉（ハ）麻黄（マワウ）（等分）甘草（カンサウ）少シ加へ煎（セン）じ服（フク）すべし 又杏（アンズ）の黒焼大によし 但シ（あんずの実（ミ）を丸の侭にて黒焼にすべし）

右両法共に水氣（スイキ）腫病（ハレヤマイ）にも用ひてよし

○老人の小便閉にハ麦（ムギ）のめしを服（フク）してよし

又茄子の花の陰干（十ヲ）甘草（二分）此二味を刻（キザミ）煎じ服するもよし

又 茄子の蔕（ヘタ）心（シン）をとり皮むくりを黒焼にして細末（さいまつ）にして少シ臍（ヘソ）の中へ入紙をぬらし蓋（フタ）にしてよし

○痛風には厚朴 陳皮 半夏 葛根 大腹皮 白朮 升麻
茯苓 柴胡（右何れも弐匁つゝ） 藿香（壱匁五分） 紫蘇（六分） 甘草 小人参（各一匁）
奇効の方なり

○手負又は怪我にて大に斬るには生馬を一味粉にして
疵よりかけ木綿にて括あげれば縫ざれども疵愈るなり

○牛馬の煩には何病にても生馬を用ゆべし

△瘭疽（爪もとのいたみ） 梅肉 酸漿實 鼹鼠黒焼 薄き糊にて

○交合能練て木綿切に塗て指の爪先をよけて指を巻べし
熱にて乾時は湯にてしめし一日に一度つゝ巻替べし

○腹痛連年毎日痛て息事なく虫にあらず積にあらず
病名知かたき證あり左の薬を用ゆる時は黒き物下ル之
痛止を期として薬を休むべし
紅梅實十匁 藍葉七匁 莙薘草五匁 右いづれも黒焼にして
白湯にて飲下も又酒毒の痛留飲の痛の者に与て
速功有なり醫術験なき者に与ふべし

○陰門陰莖などの痒して堪がたきは終には髪毛の抜るに
及ぶものなり是には蛇床子の細末に姫のりを少し入
大指などの疣の如きものを縫其中に薬を入土禍乃

酒にて煎じ能程に温（アタヽ）めて脹門よりさし込る事四五度に

して治る外の痒（カユキ）にハ蛇床子（ジヤシヨウシ）を沢山煎じ度々洗へハ速に治ス

○齲歯（ムシクイハ）にハ百足（ムカデ）の黒焼を歯の穴へ入置し治る事奇之

○痢病の熱毒とさるにハ粳（ウル）の白米（十匁）寒晒（カンサラシ）餅（モチ）白米同寒晒（十匁）

挽茶（ヒキチヤ）（三匁）胡椒（コシヤウ）（上品四匁）甘草（カンサウ）（三匁）右五味能々細末にし

水白湯茶何にて用ひてもよし萬さし合なし

此薬ハ上ッ方暑中（シヨチウ）に召上らるゝ霊方（レイホウ）なると玉誉（キヨクヨ）上人

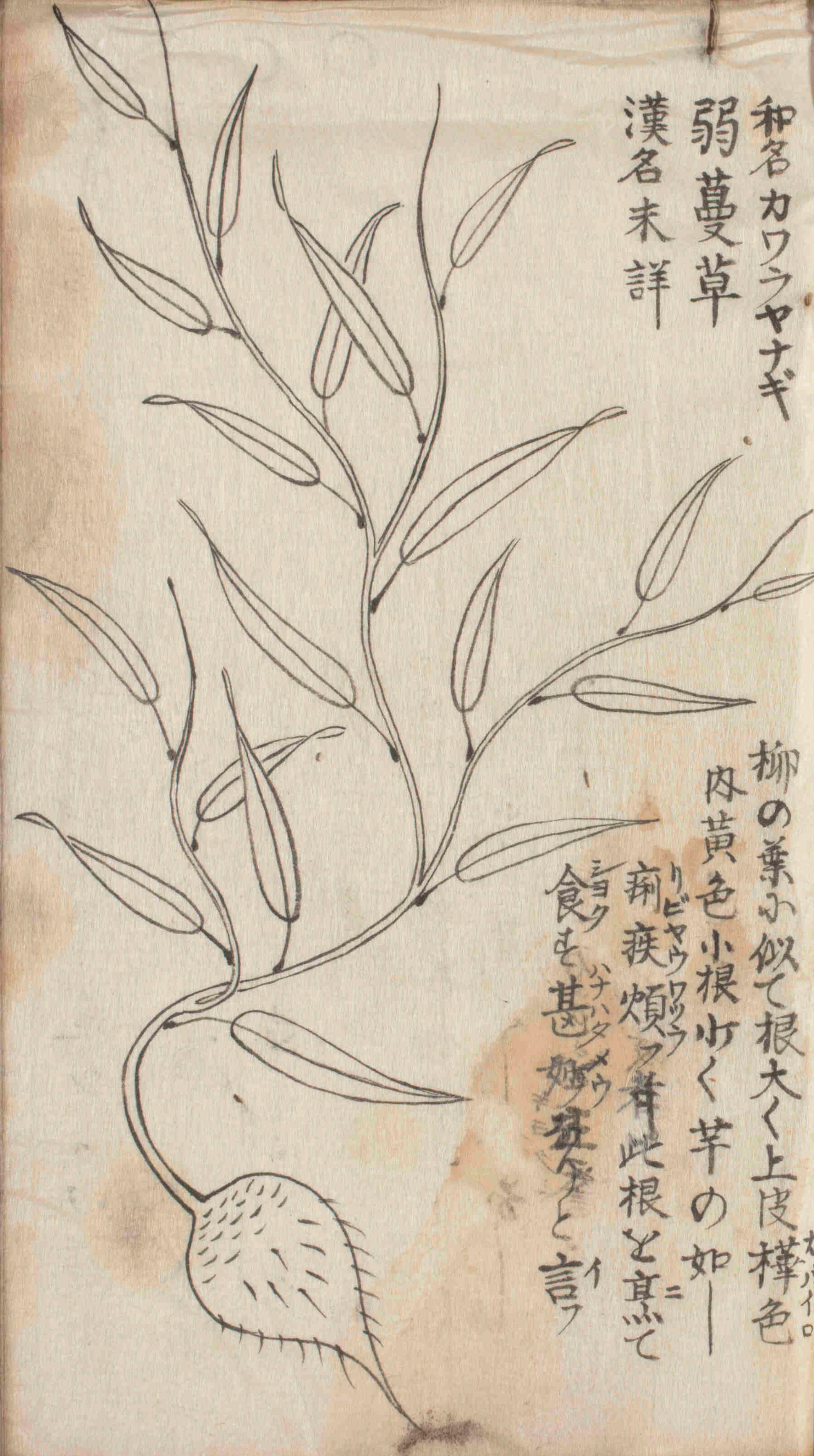
授（サヅカ）る所にして痢疾（リシツ）の毒を去快く通し腹中を温め

霍乱（クワクラン）寝冷（子ヒエ）によし

和名カワラヤナギ

弱蔓草

漢名未詳



柳の葉に似て根大く上皮樺色（カバイロ）

内黄色小根少く芋の如し

痢疾（リビヤウ）煩（ワヅラ）フ者此根を煮（ニ）て

食（シヨク）を甚（ハナハダ）妙（メウ）なりと言（イ）フ

小濱の石碑しるし

一 小濱ニ秋月自雲と彫刻せし墓之此石塔ニ高家なる侍し居たる由也ハ忽ち卒命すると也 元来法名秋月自雲居士なり 在世の時ハ諱ハ伊達家ニ仕へ大坂表出陣し瀧田家ニ尚其子孫し後其節つゝしみ生涯侍候ニ

若髪止めて仕度と稱して貝數をとゞむる

一下野國日光山の北七八里ゟ西に栗山といふ温泉あり此所の山に少の洞あり此洞より潮水あり焼にしてこれを食料に用ゆ味ひ焼たる塩めやし弘法大師の加持なりし所といふ此所は至極の山中にて海邊へ八四里路を隔てたり米穀の乏しきゆゑ此温泉あるは諸の痔の病ヲ治する神變あり

一本朝當今の田割三百坪を以て一反とし三千坪を以て一町とし

○ある人加賀の千代女が名ありとて。海の中なる碁をおくれり
ところに付たりと
○志ろすけく黒よ貝との川鱗（うれい）三重
同じくかまの志くやちふね作ありくありと云るよ
○志くききくその花をあるよ国のえ見えく
またく善阿弥（がある）とふる者の口号（くちずさみ）とくく
小キカの「雨一種の中にありあけるく堂建く一ト万國（くこふ）くるみくとせん
「数まちと千両よ家く（めん）をとりて歌よまむ君ぞ道也

大きなもの

〽天ハ両眼ハ日月風ハ息海山ともに抱なりけり

〽おし丸め虚空をぐいと呑込れバ須弥も天地もさはらざりけり

長きもの

〽奥州の松ぶの里に寝ころして足をゑぞへと延しつる哉

高きもの

〽大海を湛ら上ると見し雲の峰があたま雲にはなれぬ

まづい物

〽まさ征人の牡丹あるかハ下手浄瑠璃を聞てしまふ又色によえて寝る

〽まづき書ひ素人浄瑠璃ミめんと無き熱して黄な声を出

〽算のもつ書ハ筆の又斎ん以下ミづから身ホしむ書の的

〽薄墨にかく文章とみゆるかな霞てかへる春のかりがね

○蜀山人杏花園南畝寝惚先生太田覃字子耜通称直次郎後改七左衛門といふ人に知る処なり死して白山本念寺に葬をかねて先生自ら戒名を杏花園心逸日休居士と号し文政六癸未年四月六日死す此本念寺に北山山本信有先生の墓あり此寺に蜀山人かつて北山先生と悼し自筆の詩歌ありと

哭(こく)スニ北山先生ヲ一

萬巻(まんぐわん)蔵書(ざうしよ)在(あり)ニ腹中(ふくちう)ニ一　如(ごとき)雲(くもの)弟子(ていし)叩(たゝく)ニ空々(くう〳〵)ヲ一

非常(ひじやう)事業(じげふ)非常(ひじやう)ノ氣(き)。　天(てん)不レ慭(なまじひ)ツ遺(のこさ)ニ一老翁(いちらうをう)ヲ一

右　南畝(なんぽ)覃(えん)

詠もまたおしはかりける苔(こけ)のしたにてもさぞ夜もすがらかくあるらん

うかりけるなげきもまてそのが名の春も霞て空に行らん

お隅田川かすみ花咲世毎の都子鳥

右ハ三月廿八日の忌なりとまて辞世(じせい)の句とそ

醉世(すいせい)ト將夢(む)苑一　七十五居諸(きしよ)

有酒市舗(ふ)近三　盤餐(ちんざん)比目魚(ひもくぎよ)

時鳥鳴けるかたに和松魚長と妻との入れめう孫

猩痕廟にして老ふるゝ北山南畝(なんぽ)両先生ともに世をさりし時ハあゝ〳〵その名を轟(とゞろ)かしたりしが今葬訓ルひとつ塚にしてその端を帯(とう)を並べ一塊土(いつくわいど)饅頭(まんぢう)となす世人こゝにかくの

嗚呼妙く若道どれまうなきみえれと云へバんきそべ洞(あなぐら)を遁(のがれ)ぬ

あまこそ東西の句をわりひ出しまする讃る

○山の畝(うね)の崩(くづ)まくるまでに太むろりかも有れば蘭(らんけい)の香し

○江戸の花散(まきちら)し跡をさんなみよきたとふと見え気霊あし

（古歌）極楽(ごくらく)ハ西にあれども東にもききさ道さがせ三ヶ寺にあり

文化年中作稽なる松の風にあきさま大なる枝折るとりしハ納る

御んとつて其雲(うん)の名ひとなして色る風吹せしよりハ々の

祝(ゆく)しまりし根葉りよ

○●民の松折(をれ)るが時(うつす)と様(きな)よせん法くを起(つき)じ君がよまでひさ

又あるへ年賀(としほぎ)を祝(ゆく)しほるまでの字様数四十九歳り

なれハ様の帽へを志(つゞ)し不奥(ふけう)ありしとあるへ祝しく

○七ッ宛(づゝ)七福神に配(くば)りちや数ハ年にあちら賀へのまち

蜀山人八十の年賀(が)へを祝ひけるには

○八十の賀へらくてあがら生延(いきのび)くるまでの齢(よはひ)と松に契(ちぎ)るゝ

東海寺沢庵和尚に稲葉濃州勤仕の也日に退屈(たいくつ)せざるものの教諭(をしへ)を

請(こ)ひ給ひしかば

浅ましやおりへかめし(ひじ)の剃(こつ)道具きのふのちゃまみの道祢(あか)が

平城天皇二代の孫左大弁右章卿(ざさいのきやう)正二位権中納言匡(まさ)

房(ふさ)にハ博学(はくがく)にして名誉(めいよ)の人にて天永二年(ねん)七十にして

薨(こう)せられぬ此の秀くし時死へゆく門理とよめる

おひあはさるゝと女房たちあまた侍りて是を引
たまへとて和琴を出しけれはあそへは
「お後乃関のあるましき人様かあつまのとも志遣きりらう
芭蕉翁の九品蓮台とよみて題に
○さくの一名川に咲くまゝ蓮ならねと
いふを人の川に蓮も咲くるものありやと難せしに
翁吐つらくしまく古語なる
「極楽の前に流る深川蓮宗あって浮世の心常也
とふすりし仮なりと云へしとし後に尋れは
翁の志トに深川の一英雄らくへと
欺と屋濃にあらは又桜井中務基佐といふ
武士桜井の從人あく連歌の達人ゝ時に山名宗全
亭にゆく連歌と興行せしとき所の弟蓮と付たり
宗祇曰所ゆかにゆく付し證歌あらはいふにも志らる
為しと云基佐弟ひ志らう
「極楽の弟にあゆみ深川蓮あって是等も冥
と宗祇あへ撰集に出しあまりくハ
当の趣なりしとして
武人水府義公の御撰筆の一軸の写也と云う

五せうと云は

仁と云ふハよろしく慈　義と云ハかたくある

禮と云ぶ色つらひよ敬　智と云ハうそと除く

信と云ぶそんとまもる

気ハ長く勤（つとめ）ハかたく色うすく食細（しよくほそ）ふして心太（こゝろふと）く

なす兄名ぞと人ハいひてすえあはじ心のとれ

いろぐ善忘ん

天の道と耳に学てみの為を知る人ぞ尊し

都し兄たてしらぬハむかしく天の道ゆるつとハよ　誉くれ人と

人ハ（けうん人ハ）時勢ハ波間の泡あるやきえて不易の尊　婆たよ尊し

身の果ハ酒の筆（さけと文との）の寿死と多年貝生し女羽筆

武帝瘧（ギヤク）病と悩ませ給ふ時の御製

まつと持仏〳〵のうらハや三ち善光寺にかゝり行後
瘧（キヤク）和訓ワラワヤミを隠して殺せ給ひし煩ひ割てみれハ忽ち
煩悩去しところやされハ瘧と患（ウレフ）るりの此煩悩を
書なく 撫え母法善ハ瘧落るといふ

一 念佛と申されん乃ちまかりたゝハこゝろに念仏申さぬ
さるべきの事ハまつるゝ中にあるとハあらまほしく世間出世
の善事にも志ひて勧むるとてそ勧むるを得ぬ将
かもれハ叶ぬほと唯志ひて作と見よかしとてかく

むしとて引くべくそ手置露に雲秋の山田よかゝる鳴子も
柿ゑ捨女六歳の時の句

雪の朝二の字二の字の下駄のあと
六歳乃時の句

霜の橋や君か姿のぬとゝまらし

花をやれ折しや髪のうきよめ

秋風の吹くらふに糸柳あらはそくもちる又（ア）の部

かゞの千代女の句

〽ほとゝきす郭公とて明にけり

〽恙ゐうろ志つねど撫の袖ちぎり

〽起て見つ寝て見つ蚊屋のひろさ哉

越前歌川女の句

〽朝がほや地よりはくとゝあふなが年よ

〽能かるよつく〽こゝぞそりしひ乃

〽手ありが葉一筋乃ちるかな

〽寺のゝ山吹仏に家がり行り

南無阿弥陀仏声をかしきて

〽我身ハ極楽に棄て六にたそれ

あはれあはれはかなしあはれ

〽かゞうるみ原ハ浪近の殺あり哉

ゆるりそそよこの人の申す

いつはとていつまでをらん今さらや

君か千々庵の菊まづいふ御老

竹の根よ降つむ雪の水音のゆらの日消て

（その夜消たり）

四方山の雪は見えて竹の根に降は雑ぞ

（知らなりける）

竹の雪消るとともかも細雪も長かりけりと

（筆て記るし）

芭蕉翁奥の細道見物の折道より

八月十五日夜野田から村の蕪翁

月見の発句連句の折しもなく郷し

千とせ以来村の翁是非ちに送え

（已上六）

三日月の晩より精しく寄り出申

（第句）

いつのまにか秋も近し

（きり）（せけ）

時鳥明けぬ捨し

稲田を刈く

花園大五庵秋の蟲ぞ織虫の鳴かると

大正元庵部へ下り候の事かしこ是なる

一 前よみくと讀まれけれバ春ハ山ざくら
青柳のとしられバ山吹のゆのとも
梅ハれうくとかたまり鶯の巣をかけぞ
不産とかひよ出り秋中ゆよ鶯と師は出お

青柳の縣の糸を繰返し長居して秋ゆへ
と濃ゆへ梅ハ花希ともなし（機織そ鳴く）
ひろまり

十六 頭の歌 月八ツ無し八月一つ加八十丈（無女）
月ハ小月見る月無し大月と月見ハ六ツの月
十七 頭の歌 月九ツ六ツ九月一つ加ハ十まで
月ハ小月見る月も月望と月と有月も月の月

十八 頭 縁歌の華句意
一 子（ヒトゴ）よ二子（フタゴ）皆（ミナ）達者（タッシヤ）嫁御（ヨメゴ）幾世（イツヨ）も無差支（ムサシ） 難役士（ナムナウヤクシ）爰（ココ）の
宿富有（ヤドトウ）

きしあかる車のえ世の世の中ハかからぬむりし志賀高野も勝
きしあかるふの華のえあのさかへぬきのふ和へぬあか日
あゆなりと思ふんゐるむかさまそれふれもむすく策しぬるべく